チャーマーズの「意識しない心」について

――思考可能性と意識の不在をめぐる問い――

佐金　武

1. はじめに： チャーマーズの心身二元論と検討すべき問い

チャーマーズによれば、主観的な質を表す意識の存在は独立に解明されるべき問題であり、その他のものへの還元によって説明できるものではない。とりわけ、物理（脳）理論への還元による説明や、心の機能主義的な説明は、失敗に終わる（あるいは、意識の存在を前提とするがゆえにこれを説明していない）。このようなチャーマーズの心身二元論の主張は、次の論証に基づく。まず、1）思考可能（conceivable）なものは成立可能（possible）である。ところで、2）物理的構成や心的機能は私と同じだが意識を持たないゾンビの存在する世界が思考可能だ。それゆえ、3）ゾンビ世界は成立可能である。4）ゾンビ世界が成立可能であるならば、物理主義は誤りである。よって、5）物理主義は誤りである。

さて、本論での批判的考察は主に、前提 1）と 2）に関わる。1）は、「思考可能性–成立可能性テーゼ」と呼びうるものであるが、哲学史上いくつかの適用例があり（デカルトの心身二元論やヒュームによる因果の非実在の証明の場合）、また現代においてもこれをめぐる数々の議論が提示されてきた(e.g. van Cleve, 1983, Yablo, 1993)。ところが、チャーマーズによるこのテーゼの擁護は、彼が「認識論的二次元主義」として展開する理論に依拠する独自のものであるから、まずこれを概説しその問題点を探る（第 2・3 節）。ここから、1）と 2）は独立の前提ではないことが看取され、ゾンビ世界の想定が実は、一般的原理としての 1）の適用例ではなく、むしろそれへの反証例となりうることを論じる（第 4 節）。次いで、ありうる再反論をいくつか検討しこれらに応答する（第 5 節）。

2. チャーマーズによる思考可能性–成立可能性テーゼと認識論的二次元主義

周知のように、思考可能なもの、すなわち認識論的に可能なものは成立可能であるという主張は、クリプキ(Kripke, 1980)とパトナム(Putnam, 1975)によるア・ポステリオリな必然性の例証によって、少なくともそれを素朴に信じることはできなくなった。ここで思考可能あるいは認識論的に可能であるとはおよそ、以下のようなことである。

（C）S が思考可能あるいは認識論的に可能であるのは、S がア・プリオリに排除されない

（S がア・ポステリオリにのみ真なる）ときである。

クリプキやパトナムが論じたのは、本当に成立可能なものあるいは形而上学的に可能なものの領域は、単に思考可能なものや認識論的に可能なもののそれよりもずっと小さいということだ。つまり、(C) は成立可能性の十分条件ではない。たとえば、古代の人々にとって、「明けの明星≠宵の明星」という状況は思考可能だったはずである。しかし、「明けの明星」と「宵の明星」が共に、すべての可能世界で同一の対象を指示する固定指示子と見なされ、あらゆる同一性言明は必然的である限り、現実に「明けの明星＝宵の明星」という天文学上の事実が判明した以上、その否定は成立可能ではない。自然種に関する同一性言明「水＝H_2O」もまた同様である。水は無色透明である、無味無臭である、渇きを潤す等々の表層的な質的記述において違いはないが、「水＝XYZ」が判明するような双子地球を考えることができる。ところが、「水」は自然種名であり、ある対象にとっての何らかの本質を名指しその集合を固定的に指示する働きをもつ語であるから、我々を取り巻く自然環境の科学的な探究の結果、「水＝H_2O」が判明した以上、それを否定するようないかなる事実も成立不可能である。これらの例証により、単に思考可能なものは本当の意味では成立可能ではない。科学的探究を通じた経験的証拠は、それと両立不可能な認識論的な可能性を消去する役割を果たす。そして、必然／偶然という様相概念に多義性はなく、ある事柄が必然であるとはすべての可能世界における真理として定義されるが、このことは形而上学的な可能性についてのみ意味をなす。以上の要点を次のように整理しておこう。

クリプキ–パトナム的な必然性についての見解

(1) 二種類の可能世界、すなわち、認識論的に可能な世界と形而上学的に可能な世界が区別されなければならない。

(2) (1)の区別の正当化は、我々の現実世界についての探究により得られる経験的証拠である。経験的証拠は、それと両立できない認識論的可能性を消去する役割を果たす。

(3) 様相の概念は、二種類の可能性のうち形而上学的可能性にのみ適用されるのであり、それ以外の様相についての見方はありえない。

(4) それゆえ、一種類の必然性／偶然性のみがある。

チャーマーズの思考可能性–成立可能性テーゼ(Chalmers, 2002)は、様相の二次元的な枠組みの彼独自の解釈、すなわち一次／二次の区別を導入する認識論的二次元主義を中核として、上に見たア・ポステリオリな必然性をめぐる議論を論駁するのではなく、それを取り

込む形で展開される。以下、認識論的二次元主義について概説する。

チャーマーズによれば、諸表現（文や名前）には一次と二次の二種類の内包（可能世界から外延（真理値や指示対象）への関数）が伴う。一次内包は、ある主体と時点に中心を持つ、現実として考えられた可能世界から外延への関数と見なされる。二次内包（通常の意味での内包）は、反事実的な可能世界から外延への関数と理解される。一次内包は、任意の可能世界とその同じ世界との対から外延へと移る関数と見ることもでき、また、どの世界が現実として中心化されるのかに応じて、その二次内包を決定する。つまり、一次内包は、可能世界から関数（二次内包）への関数になっているという点で二次元的である。

「水」を例にとって具体的に説明しよう。クリプキとパトナムが論じたように、「水」の外延は、我々の地球で現実に「水＝H_2O」が判明した以上、双子地球を含むどんな反事実的な可能世界について評価しても H_2O であることに変わりはない。それゆえ、地球での「水」の二次内包は、あらゆる可能世界について H_2O を外延にもつ。他方、チャーマーズの示唆するところでは、「水」の一次内包とは概ね、「水らしきもの」という表現によって我々が理解する概念である。ここで、「水らしきもの」の概念のうちには、無色透明である、無味無臭である、渇きを潤す等々の記述が含まれてよい。さて、双子地球における「水」の一次内包とは何だろうか。XYZ である。というのも、双子地球での「水らしきもの」は、そこでその概念を満たすもの、すなわち XYZ を選び出すはずだからである。さらに、双子地球が現実世界である限りにおいて、その世界からみたどの反事実的な可能世界についても、「水＝XYZ」である。したがって、双子地球での「水」の二次内包は、あらゆる可能世界について XYZ を外延にもつ。こうしたことは、「水＝ABC」であるような三つ子地球なるものを考えてみても同様であろう。したがって、「水」の一次内包は、現実として中心化される世界に応じて変化するが、一度ある世界が中心化されるとその二次内包は固定的である。（行列 1 参照）

二次元（反事実的世界）→

一次元（現実世界）→

	W_E	W_{TW}	W_{TR}
W_E	H_2O	H_2O	H_2O
W_{TW}	XYZ	XYZ	XYZ
W_{TR}	ABC	ABC	ABC

行列1：「水」の内包

地球、双子地球そして三つ子地球について、「水」の内包を評価している。対角線上の値は、「水」の一次内包、「水らしきもの」を表す。横列は、「水」の二次内包を表す。この行列の全体は、二次元の一次－二次内包を表す。

以上のことから、ア・ポステリオリな必然性だけでなくア・プリオリな偶然性も説明される。ある文 S がア・プリオリであるのは、その一次内包があらゆる可能世界において真であるときであり、さもなければア・ポステリオリである。ある文 S が（クリプキのいう意味で）必然であるのは、その二次内包があらゆる可能世界において真であるときであり、

さもなければ偶然である。文 S として、「水は H_2O である」と「水は水らしきものである」をとれば、ア・ポステリオリな必然性とア・プリオリな偶然性の例がそれぞれ得られることになる。（行列 2・3 参照）

二次元（反事実的世界）→

一次元（現実世界）↓

	W_E	W_{TW}	W_{TR}
W_E	T	T	T
W_{TW}	F	F	F
W_{TR}	F	F	F

行列2：「水はH2Oである」

二次元（反事実的世界）→

一次元（現実世界）↓

	W_E	W_{TW}	W_{TR}
W_E	T	F	F
W_{TW}	F	T	F
W_{TR}	F	F	T

行列3：「水は水らしきものである」

WEが現実として考えられるときには、どの反事実的な世界でも「水」はH2Oを指示するので、「水はH2Oである」は二次的に必然である。しかし、その他の世界が中心化されたときには、「水」はXYZやABCを指示することになるから、この文は偽となり、一次的に必然ではない（ア・ポステリオリである）。（行列2）

WEが現実として考えられるときには、「水」はH2Oであり、反事実的な世界のうち「水らしきもの」という概念を満たすものがH2Oである世界においてのみ「水は水らしきもの」は真である。その他の世界が現実として考えられるときも同様である。対角線上の真理値Tは、この文が一次的に必然（ア・プリオリ）であることを表す。横列の真理値Fは、これが二次的には必然ではない（偶然である）ことを反映している。（行列3）

さて、このように解釈された様相の二次元的な枠組みは、チャーマーズの思考可能性–成立可能性テーゼにどのように貢献するのだろうか。彼の戦略は、一次的な思考可能性から二次的な成立可能性へのある種のギャップを認めつつ、一次的な思考可能性から一次的な成立可能性への含意関係を確立することにある。確かに、「水≠H_2O」を含むような一次的な思考可能性（そのような現実世界が存在すると考えること）は、ある二次な意味でそれが成立可能であること（我々の現実世界から見た反事実的な可能世界のどこかで「水≠H_2O」であること）を含意しない。しかし、だからといって、「水≠H_2O」であるような現実世界が存在しうることを妨げるものではない、とチャーマーズは考える。二次元的な枠組みの前述の解釈は、このことをすっきりと説明してくれるように思われる。「水＝XYZ」は現実と考えられた双子地球においては真であるが、反事実的に考えられた双子地球においては偽であると説明することができる。また、この説明では、クリプキやパトナムが「水＝XYZ」は形而上学的に不可能だと論じたことは、反事実的に考えられた世界のすべてでそれが偽であることとして反映されている。だがこれは、その言明が現実と考えられたあ

る可能世界においては真であるということと両立可能であり、少なくともそのような可能世界の存在を拒否する理由はない。

以上の説明図式に収まらないような反証例はなく、認識論的な諸々の可能性はそこにア・プリオリな不整合がない限り等しく存在する、とチャーマーズは示唆する。そして、それらとクリプキ流の形而上学的な諸々の可能性とを分かつと考えられていた経験的証拠の果たす役割は実は単に、我々がどの世界の住民であるのかについての情報を与えることに過ぎないという。認識論的に可能な諸世界と形而上学的に可能な諸世界との間には、それら自体に何か存在論的な身分差があるわけではなく、その相違は同じ可能世界についての異なる二つの見方（一次／二次の見方）に由来する。ゆえに、思考可能なものは、成立可能なもののうちにある。これがチャーマーズの描くヴィジョンである。

チャーマーズによる必然性についての見解と思考可能性–成立可能性テーゼ

(1) 一種類の（認識論的＝形而上学的）可能世界が存在する。

(2) (1)の世界に対するふたつの異なる見方、すなわち一次的な見方（現実世界として考えること）と二次的な見方（ある中心化された現実世界が与えられたときの反事実的な世界を考えること）との区別がある。

(3) (2)の二つの見方は、二種類の必然性、すなわち認識論的な必然性（＝ア・プリオリ性）とクリプキ–パトナム的な意味での形而上学的な必然性との区別に対応する。

(4) 経験的証拠の果たす役割は、認識論的に可能であるに過ぎないものの消去ではなく、どの世界が現実なのかについての情報を与えることである。

(5) よって、諸々の可能性は経験的証拠が与えられた後にも存在し続けると考えてよく、思考可能なものの総体はこのうちに収まる（思考可能なものは成立可能である）。

3. 認識論的二次元主義の本質的な問題：一次の次元、ア・プリオリとア・ポステリオリ

前節で見たように、チャーマーズによる思考可能性–成立可能性テーゼは、彼独自の認識論的二次元主義に根拠をもつ。だが、ここで注意すべきは、ブロックとスタルネイカー(Block & Stalnaker, 1999, pp. 30-45)が指摘するように、そしてまたチャーマーズとジャクソン(Chalmers & Jackson, 2001, p. 337)も同意するように、抽象的な様相の二次元的枠組みがそれ自体で彼の意図するテーゼを確立するわけではないということだ。つまり、抽象的な枠組みの解釈が問題なのである。チャーマーズ(Chalmers, 2004)は、ありうる解釈を「文脈的な理解」と「認識論的な理解」の二つに分けて、カプラン(Kaplan, 1978, 1989)やスタルネイカー(Stalnaker, 1978)らの古典的な解釈を前者に、彼自身の見解を後者に分類し、認識論的

二次元主義を展開している。また、ソームズ(Soames, 2005)は、チャーマーズとジャクソンの議論を記述主義の復興と捉え、これらを「弱い二次元主義」に対して「強い二次元主義」として検討し、反-記述主義的な立場から批判している。問うべきは、認識論的な理解あるいは強い二次元主義が擁護可能か否かである。

チャーマーズの認識論的二次元主義に特徴的なことは、カプランの場合には「意味特性（character）」と呼ばれるものを一次内包と捉え、スタルネイカーのいう「対角線命題（diagonal proposition）」の対応物として一次命題を考えるところにある。他方、カプランの「意味内容（content）」とスタルネイカーの「表現された命題（proposition expressed）」はそれぞれ、チャーマーズの二次内包と二次命題とに対応するが、ここに特筆すべき相違はない。カプランとスタルネイカーにとっては、意味特性や対角線命題は、発話の文脈あるいは相互理解のための語用論的な場と見なされる可能世界から、意味内容や表現された命題を決定するものである。これに対して、チャーマーズは、文脈あるいは相互理解の場と反事実的な値踏みの状況のような区別を認めるのではなく、既に見たように、基本的には一種類の可能世界のみを考える。一次的な必然性も二次的なそれも、すべての可能世界における真理として定義されるが、そこには見方の違いがあり、前者はア・プリオリ性として、後者はクリプキ-パトナム的な意味での必然性として解されるのである。

一次の次元が表すとされるア・プリオリとア・ポステリオリという概念は、通常の様相オペレータと同様、相互的に定義可能である。すなわち、ある事柄がア・プリオリであるのは、それが偽であるということがア・ポステリオリではないときであり、ア・ポステリオリだというのは、それが偽であるということがア・プリオリではないときである。したがって、どちらを原初的なものとして考えてもよいが、仮にア・プリオリ性をとるとすれば、チャーマーズの解する一次の次元が擁護できるかどうかはこの概念の正否にかかっている。一次の次元をア・プリオリ性へと連結する彼の定義は、およそ以下の通りである。

(P) ある言明 S の一次内包が可能世界 W において真であるのは、実質条件文「W が現実ならば S である」がア・プリオリなときである。(Chalmers, 2002, p. 165)

可能世界 W を現実として考えるとは常に、何らかの記述 D のもとにそれを把握するということである。チャーマーズはこれを「正準的記述（canonical description）」と呼び、二つのことを要求する。すなわち、正準的記述は、1）意味論的に中立な語彙による、2）認識論的に完全な記述でなければならない。意味論的に中立な表現とは、反事実的な諸世界におけるその外延が、現実世界のありかたに依存しないような表現である。つまり、意味

論的に中立な表現であるなら、それは現実と考えられた可能世界でも反事実的に捉えられた可能世界でも同じように振る舞うはずである。また、記述 D が認識論的に完全であるのは、D が認識論的に可能であり、かつある文 S について「D&S」と「D&ーS」が共に認識論的に可能となることがないときである。つまり、D が認識論的に完全であるためには、それは認識論的に可能な文であってできる限り特定的でなければならない。

さて、(P) について論じるべき問題は次のことだ。まず、可能世界と記述とを別個のものと考える形而上学的なアプローチをとるなら、記述 D によって与えられる可能世界 W が必ず存在しているはずだという前提が問題になる。D の記述する W など実は存在していないとき、D からア・プリオリに帰結するはずの文 S はどんな可能世界についても真ではなく、それは認識論的には可能であっても形而上学的には必然的に偽である。これは、チャーマーズのいう「強い必然性（strong necessities）」が存在する場合に当たる。可能世界をその記述と同一視する認識論的なアプローチをとるなら、「不分明な領域（the twilight zone）」と呼ばれる二つの場合が問題となる。一つは、ある文 S は真であることが可能であるように思われるのだが、完全であるはずの何らかの記述 D を与えてもなお S が帰結しないとき、つまり D が S について不完全であらざるを得ないときであり、S が「判読不可能な（inscrutable）真理」に当たる場合である。もう一つは、ある文 S が我々の有する概念のレパートリーによっては形成することができないような事態を表していて、そのような事態の成立・不成立の可能性を確定できないときであり、S が「未決着の思考不可能な（openly inconceivable）諸言明」に属す場合である。

チャーマーズの診断では、上のような問題のある事例は存在しない。私はこれがそうではないことを次節で論じる。我々がそこで取り上げる一例とは正に、彼が心身二元論を確立するためにその思考可能性–成立可能性テーゼを適用するゾンビの仮説である。議論の要点は次のとおりだ。すなわち、実質条件文「ゾンビ世界 Wz の記述 Dz が現実ならば、物理的構成や心的機能は私と同じだが意識を持たない存在者がいる」は、ア・プリオリではないと論じるつもりである。ここで意図しているのは、ゾンビ世界の仮説が不可能というよりはむしろ、それが不分明な領域をなしている（Dz は意識の全くの不在を主張する言明について不完全であらざるを得ない）ということだ。というのも、我々が直接には見知りを持たないものであって、「ゾンビにとっての意識」のような非物理的性質の存在をア・プリオリに排除することはできないからである。これが正しいとすれば、ゾンビ世界の思考可能性は必ずしも明らかではないか、あるいは、(P) がすべての事例には成り立たないこと、それゆえ認識論的二次元主義やそれに基づく思考可能性–成立可能性テーゼは、ゾンビ仮説にも適用可能な一般的原理としては確立できないことが示される。

4. 意識の不在の思考可能性：ゾンビ世界について意識の不在はア・プリオリか

意識が物理的事実に還元できないことの諸説には、意識とは「認識主体にとって、それであるとはどのようなことか」を問いうることであるとする論証(Nagel, 1974)、物理的条件は同じであるのに意識体験が異なる逆転スペクトルの想定による論証、意識と物理的な対象へのそれぞれ異なる指示が様相を通じて固定的であることに依拠する論証(Kripke, 1980)、また付帯現象としてのクオリアについての知識の観点からの論証(Jackson, 1982, 1986)がある。チャーマーズの心身二元論はこれらすべてと深い関係にあるが、積極的に推し進められているのはゾンビ世界の思考可能性による論証である。このゾンビ論証の特異な点は、意識の全くの不在が可能とする主張にある。

上に挙げた論証はいずれも、「誰かがある物理的性質 P を伴う状態にあるとき、その人はある意識的性質 Q を伴う経験をする」はア・プリオリではなく、その偽なることが思考可能であるということに依拠する。つまり、「P かつ ー Q」なる世界の思考可能性に基づく。ここで、「ー Q」の解釈には少なくとも三つのものがあり、1）ある認知主体の現実の意識体験とは異なる意識的事実が成立しているということ、2）現実の意識体験が成立していないということ、または 3）いかなる意識体験も成立していないということのいずれかである。1）は 2）を含意するかもしれないが、これらの意味で「P かつ ー Q」が思考可能だというのは、意識体験の実現がこのようであって他様ではないのはなぜかという神秘を表す。たとえば、波長七千オングストローム前後の電磁波がこの赤の知覚体験を実現することは、電磁気学からも大脳生理学からもでてこない。それに対して、3）の解釈は、そもそもなぜ意識体験が存在するのかという神秘を表明する。世界は純粋に物理的なものだけから構成されていてもよかったというのである。ゾンビ論証は、この神秘に照準を定めるものであるが、ここにはある種の不確定さが潜んでいることを以下に論じよう。

ところで、チャーマーズの公式見解では、意識的性質を表す Q は同じ固定的な一次と二次の内包をもち、物理的性質を表す P も同様である。その各々の内包は、現実として考えられるのであれ反事実的に考えられるのであれ、あらゆる可能世界を通じて不変である。意識的性質について、彼は次のように述べている。「現実世界である状態が意識体験であるために必要なのは、それが現象的な感じがするということであり、何かが反事実的な世界で意識体験であるために必要なのは、それが現象的な感じがするということである」、つまり「どこの可能世界にあっても、意識体験であるということが意味するのは、ある一定の感じがするということにつきる」(Chalmers, 1996, p. 133, 邦訳, 175 頁)。「水」がその指示対象と因果的に結びつくのとは対照的に、意識の概念にはこのような因果的要素は無関係であり、ある主体にとっての意識的性質の見知りのみが問題だからである。

しかし、上の論拠に基づきQを否定するだけでは、意識の全くの不在を主張するには不十分だと私は思う。物理的・機能的カテゴリーとは別の「意識」として、「逆転意識」や「コウモリ意識」、「ゾンビ意識（仮に存在するなら）」を含み、何であれそこでそれ自身である感じを満たすものがあればそれでよいような概念（私にとっての現象的な感じである必要はない）を考えることができる。この意味での意識は当然、どのような現象的な感じが実現されるのかについてはア・ポステリオリな要素を含む。しかしまた、どの現象的な感じを否定しようとも意識の全くの不在はア・プリオリにはならないだろう。そうすると、「Pかつ¬Q」として考えられている世界には、身体の物理的構成を私と同じくしながらこの意識体験を持たない存在者が住んでいることはア・プリオリに違いないが、私にとっての現象的な感じが意識のすべてを尽くすわけではないので、彼にとっての現象的な感じが何もないということはア・プリオリではない。

チャーマーズと我々との間の溝が、「ゾンビであるとはどのようなことか」という架空の討論によってスタルネイカー(Stalnaker, 2002)が提起した問題に関わることは明らかだ。この一見語義矛盾に思われる問い（ゾンビとは、それであるとはどのようなことかが問い得ないような存在者だと考えられているがゆえに）が実は、そうではないことを我々は本節で示唆した。しかし、批判の要点は、ゾンビ論証は不可能ということではない。そうではなく、意識の不在という状況は記述「P かつ¬Q」からア・プリオリに推論されず、ゾンビの思考可能性やそれに基づく心身二元論は根本的に不確かであらざるを得ないということにある。次節ではありうる反論に応答しつつ、さらに意識の不在の問題を検討する。

5. ありうる反論とそれらへの応答

（一）現象的な感じと意識について。記述「P かつ¬Q」から意識の全くの不在がア・プリオリには帰結しないという我々の論点に対して、私のゾンビは私にとっての現象的な感じだけでなく、そもそも意識を持たないのだ、と反論されるかもしれない。しかし、質的記述を与えることができるものは、ある一定の現象的な感じとその否定だけだろう。前節で提示した意味での意識は本性上、ある認知主体にとってそれであるとはいかなることかがが特定されない限り、現象的な感じと同じように扱うことはできず、したがって、その否定は質的記述を与えない。他方、一度特定されれば、それは意識の一事例である現象的な感じに過ぎず、それを否定しても意識の全くの不在を考えていることにはならない。

（二）理想化について。ゾンビ世界の思考可能性に不確かなところがあるとすれば、それは単に我々の言語の不完全さあるいは可能世界に対する非中立のためだといわれるかもしれない。だが、完全かつ中立的な言語による理想化の下では、どんな世界についても、

何であれ関連する物理的事実と意識的事実について漏れなく記述でき、後者の否定から申し分のないゾンビ世界が与えられるはずだ、と。そのような理想化ができるとは思えない。だが、仮に意識的性質一般なるものを等しくまとめ上げる諸表現が得られたとしても、それの意味することはどの現象的な感じとも似ておらず、もはや意識的性質とは呼びたくなくなるというのはありそうなことだ。

（三）指標性、トークン／タイプについて。チャーマーズ(Chalmers, 2004, pp. 173-5)は文脈的な理解と認識論的な理解の相違を論じて、指標性あるいはトークン／タイプの問題に触れている。文脈的な理解によれば、「私は存在する」のどんなトークンも真であり必然的な内包をもつが、それは明らかにア・ポステリオリである。他方、認識論的な理解では、発話されたときにはいつでも真ということとア・プリオリとは区別される。それゆえ、「私は意識する」のトークンがどれも真であり、私のゾンビがそれを発することから、彼の意識が必然だとは主張できない。無論、我々はそのように主張していない。意識は誰かの意識でなければならないだろうが、これはトークンの必然性とさしあたり関係がない。意識あるものは、「私は意識する」と思わなくとも、意識を持つはずだからである。

（四）「これでおしまい」について。チャーマーズとジャクソン(Chalmers & Jackson, 2001, pp. 316-20)は、世界についての関連する巨視的な事実の多くは近似的に、微視的物理学と現象学に関わる知識、そして「世界にはそれ以上の非物理的な存在者も性質もなくそれでおしまい」という否定的言明と指標的情報（「私」と「今」についての情報）からア・プリオリに引き出せるという。そうであれば、「P かつ ¬Q」プラス「これでおしまい」と指標的情報から、意識的事実の全く存在しないゾンビ世界がア・プリオリに得られると思われるかもしれない。しかし、「これでおしまい」は、物理学や現象学の与える情報とは異なり、実質的な記述の一部ではなく、むしろ、記述に対する約定というべきだろう。この現象以外の非物理的なものはないと約定したうえで「P かつ ¬Q」を考えることは、いかなる意識的事実も成立してない純粋に物理的な世界を考えることとは異なる。

（五）概念的独立性について。ゾンビ論証は、心身の概念的独立性に訴える二元論の一形態であるから、意識の全くの不在にそれほどこだわる必要はない、といわれるかもしれない。しかし、概念的独立性に基づく議論がしばしば不十分なのは、「意識なしの身体を考えること」が可能と論じるべきところを、「意識を考えることなく身体を考えること」が可能という主張と混同してしまうことに起因する。前者が可能なら後者もそうだが、逆は一般に成り立たない。それゆえ、この形の二元論が成り立つためには、意識なしの身体が本当に思考可能であることの正当化が必要だろう。目下の論争は、意識を認めうるかどうかが問題となる存在者についてであるので、たとえば机や椅子には意識がないことを引き合

いに出して、純粋に物理的な私のゾンビが思考可能だということはできない。意識を考慮することなく私の身体を机や椅子と同等のものと見ることまではできるが、意識を持たない私の物理的複製が思考可能かどうかはやはり不明である。また、私と私の物理的複製のうち私に私の意識があって彼にではないということは、彼にはいかなる意識もないと考えてよいことの根拠にはならないだろう。これが理由になるとすれば、私以外の誰もが（意識を持つものでさえ）意識を持たないと考えてよいことになり、不合理を免れない。

（六）物理主義の擁護になっていないということについて。我々の議論に対するこの反論は、おそらく正しい。「おそらく」といったのは、擁護するべき物理主義がどのようなものかに依存するからである。ところで、本論の目的は、チャーマーズの心身二元論への批判であった。要するに、我々は、ある物理的性質によるこの意識体験の実現はア・プリオリではないことを認めるけれども、ゾンビについてそれであるとはどのようなことかと問いうるようなものが全くないことはア・プリオリには推論できず、したがって、意識の不在が可能かどうかは不確かと結論する。ちなみに、シューメーカー(Shoemaker, 1981, 1999)は、逆転クオリアの可能性を認めながら、意識の不在は不可能とするより強いことを主張している。この立場の妥当性については、紙面を改めなければならない。いずれにせよ、この種の主張がチャーマーズの二元論に対してもつ意義は、彼にも明らかである。

> 逆転したスペクトルが可能であることと、ゾンビが可能であるということは、どちらも意識が論理的に付随しえないことを確証するけれども、前者が確証する結論は後者のそれに比べるとまるで弱い。思うに、逆転したスペクトルは論理的に可能だが、ゾンビはそうではないと頑張る人がいるかもしれない。もしこれがそのとおりであれば、意識の存在は還元によって説明できるが、ある特定の意識体験のある一定の性格は還元によって説明できないということになる。(Chalmers, 1996, p. 101, 邦訳, 137 頁)

6. おわりに：チャーマーズの思考可能性–成立可能性テーゼの意識に関する不完全さ

以上に論じたように、思考可能性–成立可能性テーゼには、適用可能な場合について不分明な領域が存在する。ゾンビの事例が正にそうである。ゾンビ世界の記述と考えられているものから、意識が全く存在しないことはア・プリオリに推論されない（テーゼの失敗）。意識の不在という状況が記述によって与えられない以上、我々はゾンビの世界を真には思考できていない（ゾンビの思考可能性の不確かさ）。いずれの場合も、一般原理としての思考可能性–成立可能性テーゼの適用を諦めるか、ゾンビの思考可能性を保留するほかなく、ゆえに、意識の不在の思考可能性による心身二元論は確立されないままなのである。

文献

Block, N. & Stalnaker, R. (1999). ‘Conceptual Analysis, Dualism, and the Explanatory Gap’, *The Philosophical Review* , *108*, 1-46.

Chalmers, D. J. (1996) . *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory*, Oxford University Press. (2001, 林一訳, 『意識する心』, 白揚社.)

—— (2002). ‘Does Conceivability Entails Possibility?’, in T. S. Gendler & J. Hawthorne (Eds.), *Conceivability and Possibility* (pp. 145-200), Oxford University Press.

—— (2004). ‘Epistemic Two-Dimensional Semantics’, *Philosophical Studies*, *118*, 153-226.

Chalmers, D. J. & Jackson, F. (2001). ‘Conceptual Analysis and Reductive Explanation’, *The Philosophical Review*, *110*, 315-60.

Jackson, F. (1982). ‘Epiphenomenal Qualia’, *The Philosophical Quarterly*, *32*, 127-36.

—— (1986). ‘What Mary didn’t Know’, *The Journal of Philosophy*, *83*, 291-5.

Kaplan, D. (1978). ‘Dthat’, in P. Cole (Ed.), *Syntax and Semantics: Pragmatics Vol. 9* (pp. 221-43), Academic Press.

—— (1989). ‘Demonstratives’, in J. Almog, J. Perry & H. Wettstein (Eds.), *Themes from Kaplan* (pp. 481-563), Yale University Press.

Kripke, S. A. (1980). *Naming and Necessity*, Harvard University Press. (1985, 八木沢敬・野家啓一訳, 『名指しと必然性』, 産業図書.)

Nagel, T. (1974). ‘What is it Like to be a Bat?’, *The Philosophical Review*, *83*, 435-50.

Putnam, H. (1975). ‘The Meaning of ‘Meaning’’, in *Mind, Language and Reality: Philosophical Papers Vol.2* (1975, pp. 215-71), Cambridge University Press.

Stalnaker, R. (1978). ‘Assertion’, in P. Cole (Ed.), *Syntax and Semantics: Pragmatics Vol. 9* (pp. 315-32), Academic Press.

—— (2002). ‘What is it Like to be a Zombie?’, in T. S. Gendler & J. Hawthorne (Eds.), *Conceivability and Possibility* (pp. 385-400), Oxford University Press.

Soames, S. (2005). *Reference and Description*, Princeton University Press.

Shoemaker, S. (1981). ‘Absent Qualia are Impossible’, *The Philosophical Review*, *90*, 581-99.

—— (1999). ‘On David Chalmers’s the Conscious Mind’, *Philosophy and Phenomenological Research*, *59*, 439-44.

van Cleve, J. (1983). ‘Conceivability and the Cartesian Argument for Dualism’, *Pacific Philosophical Quarterly*, *64*, 35-45.

Yablo, S. (1993). ‘Is Conceivability a Guide to Possibility?’, *Philosophy and Phenomenological Research*, *53*, 1-42.

〔哲学修士課程〕